

ヤブを漕ぐ

山 本 宗 彦（陀羅仏同人・明治大学体育会山岳部炉辺会）

白ハゲ西稜3級、白萩尾根5級…これを聞いてすぐにピンとくる人はまずいないと思う。そもそもこれらのルート名など聞いたことがないだろう。なぜならこれらのルート名は山本が勝手に名付けて自分のごく親しい人に話す時しか使っていないし、そもそもルートとして認知されているはずもないと思う。この2つのルートは、いずれも劔岳の西面に流れる白萩川をアプローチにして取り付く劔岳北方稜線の支稜である。そしてこの等級は夏季（無積雪期）の等級であり、いずれも山本が自分を納得させるために戯れに付けたに過ぎない。昨年秋に国立登山研修所のO氏から「昔ヤブ漕ぎのグレードを作っていましたよね。そのことを書いてくれませんか。」という電話をもらったとき、私は即座に「そんなことは私個人が好きでやってきたことを戯れに話しただけなので、人が読むに値する文章にはなりませんよ。」とお答えしたのだが、おだてられて結局書く気になってしまった。しかしこのようなカテゴリーの話など誰が読むのだろと正直思う。なぜならヤブ山とかヤブ漕ぎという話題のほとんどがあまり歓迎されない文脈で話されることが多いことからそのような山やそのような行為はできれば避けたい余計なことであることは間違いないのではないか。沢登りの源頭部分で水がなくなったあとにヤブ漕ぎがなければラッキーであり、もしヤブ漕ぎとなった場合でもそれは明らかに沢登りがメインだったのであって、源頭部分のヤブ漕ぎは絶対に歓迎されていないことは間違いないと自信を持って言える。そのような扱いをされているヤブ山とヤブ漕ぎが話題になるわけではないとい

う確信が私にはあった。私はかつて後輩のOと越後駒ヶ岳のセンノ沢を登ったとき、遡行後に出た郡界尾根をそのまま忠実に最後までヤブ漕ぎして駒の小屋に着いた。そのときの小屋の主人の第一声は「郡界尾根を最後までヤブ漕ぎしてここまで来た奴は初めて見た。大概はヤブを避けてオツルミズ沢の源頭部を登ってくるんだけどなあ…。変わってるな。」だったことを今でも覚えている。そうなのだ。我々も郡界尾根からオツルミズ沢の源頭部が見えたときに「沢登りは気持ちいいだろうなあ。」と思ったのだ。オツルミズ沢の強い誘惑を振り切って最後までヤブを漕いだのはオツルミズ沢の源頭部を登ることを計画書に書いてなかったということもあったが途中でより楽な方にルート変更することはなんだか逃げるみたいな気持ちを感じたことと、やっぱり最後まで郡界尾根を歩き通さないと郡界尾根に失礼かなという気持ちもあったことは否めない。要するにどうかしているのである。そしてどうかしている人の話など、どうかしている人しか興味を持たないであろう。

かつて私の師匠の一人は「登山は未知との遭遇である」から、どんなに易しくてもいいのでルート開拓をやるのが一番いいと言っていた。登山の楽しみ方は色々あるだろうが、そこに共通することは非日常との出会いだろうと思う。仮に整備された夏道であつてもそこは非日常であるが、その最たるものは誰も行ったことがないところを登るとか情報の無いところを登ることだろうと思う。要するに未踏のルー

トは未知との遭遇ができるチャンスなわけだが、未踏ルートというと、岩壁の未踏ルートとか冬季未踏ルートなどを連想するのであって、ヤブ山に行くと聞いた時に仮にそこが未踏ルートだったとしても同じように感じるだろうか。さらに、そこには開拓者精神や挑戦者魂みたいなものを感じることがあるだろうか。しかも、夏道を登っていて道を見失うことでヤブ漕ぎを強いられることや、道はあるのだが笹などの仮払いがされていなくてヤブを漕ぐことはどこでもありうるのだが、それはあくまでもイレギュラーな場合であり、敢えてヤブを漕ぎに行くというレギュラー登山としてヤブ漕ぎが認知されているとはとても思えない。繰り返すが、道が無いからヤブ漕ぎを強いられるのであるが、道がないということは、そこは誰も登ったことがない山やルートかもしれないのだ。しかし未踏かもしれないのに、価値があるとは思われない雰囲気があって、より困難を求めるフロンティアスピリットはおそらく誰も感じない。そこにいるのはただの物好きな、ちょっと変態チックな変わり者という目で見られるのがオチだ。しかし鹿島槍ヶ岳北壁の初登攀は夏であったし、小窓尾根夏季初登攀の記録は寡聞にして知らないが、冬季初登攀の前に間違いなく登られているだろう。私のいた明治大学体育会山岳部の先輩が1960年に北鎌尾根の冬季縦走の前に無積雪期の偵察をしたときのことを「まだ北鎌尾根に踏み跡がなかった頃」と言っていた。さらにさかのぼれば身内の話で恐縮だが、明治大学を創部メンバーの一人である馬場忠三郎氏は、1927(S2)年7月に槍ヶ岳硫黄尾根の夏季初縦走を行っている。私は中学生のときから硫黄尾根を夏に歩いてみたいと思っていたのでこの記録のことを知った時は心が震えた。だからこそ、私は創部者に敬意を表するためには100周年の時に硫黄尾根の夏季縦走をするべきであると提案した。しかし残念

ながら相手にされることは無かった…。

かつて山岳部の口の悪い仲間の一人が次のような替え歌を作って喜んでいて。

やぶがざわざわ 行く手をはばむ

漕いでも漕いでもまだ漕ぎやまぬ

山本喜びヤブ駆け回る

俺はテントでまるくなる

どうしようもないやりきれない歌だが、メロディーは「雪」である。私は喜んで駆け回っていたわけではないが、他の人よりも積極的に、または厭わずに（見えたようである）登っていたように感じられたせいで「ヤブの山本」などというおよそ山岳部らしくない、あまり名誉とは言えない名前までいただいてしまった。歌を作った仲間とは学生の時に奥多摩の川苔山真名井北稜に行ったことがあったが、そこはせいぜい1級から2級マイナスくらいだったと思う。彼は買ったばかりのミレー一本絞めザックを誇らしげに担いできたのだが、そのザックがヤブ（繁茂した木の枝）のせいで汚れたり傷がついたりしてかなり憤慨していたことを思い出す。このルートは登山地図に名前が書いてあるくらいのところなので大したことはないのだが、ヤブルートに対する感情というのは彼の反応がごく一般的だと思う。

ヤブ山とは道のない山であり、ヤブルートとは道のないルートである。基本的に人が行かない山なのだが、ヤブというのはただの厄介な障害であって解決すべき課題とみられることはまずないので、ヤブルートは敢えて主張するものではないと考えてきた。他にきちんと目標や課題があり、結果的にそこにヤブがあったという程度のもので、いざとなれば誰でも行けるところであり、特別に取り上げるものではないというところが登山者一般に共通する思い

1. 登山に関する調査研究

ではないだろうか。しかし、ヤブがあるということは山が整備されていないのだから山はありのままの姿に近いということでもあり、これは大事なセールスポイントだ。それに道のない山はヤブ山だけではなく、岩壁にも本来は道はない。そこで登山において道とは何かという議論もできそうだが、そもそも道があると思うから道迷いなどという遭難が起きるのであって、最初から道があることの方がイレギュラーなのだという視点に立てば「道迷い＝道を失うことによる遭難」は無くなるのではないかとさえ思う。そもそも日本のように森林限界が高く、降雨量に恵まれた山容の穏やかな山では樹木に覆われていることは当たり前という意味からもヤブ漕ぎが話の主題に上ることはなかったのだろう。

それにヤブ漕ぎという行為は、ヤブが行く手を阻んだときに仕方なく行うことであり、それができなくて登れないという意味で技術的に認知されているものではない（ような気がする）。つまり登山行為の中で「岩登り技術」とか「冬山登山技術」のように一つのカテゴリーとして確立されていて、三点支持とかアイゼンワークという技術練習と同じように練習が必須であると考えられているとは思えない。夏山におけるテント設営なども練習をするが、ヤブ漕ぎ技術を練習するということは寡聞にして聞いたことが無い。そもそも技術として成立するとは思われていないだろう。ヤブが現れたら諦めて突っ込むだけであり、あとは体力に任せて力づくで行くだけであると思われているのではないだろうか。しかしヤブ漕ぎが上手な人を見ていると、あたかもモーゼの十戒のようにヤブが自ら道を開いてくれているかのように見えることがある。一口にヤブと言っても相手は生きている植物なのであってただの障害と考えてはいけない。草木の生え方、枝の張り方は千差万別であり、それぞれしなりやすい向きや力を逃が

しやすい掴み方があるので、できるだけ周囲を見ながら草木の伸びる摂理に沿って力をかけ、草木の伸びたい方向に無理をかけないように漕ぐのがコツなのである。力任せの強引なヤブ漕ぎは草木を完全な敵にしてしまうが、相手の都合に沿ってヤブを漕ぐと友だちになってくれる。これはとてもデリケートな技術だが、そこに山があるから登られたエヴェレストやそこに大岩壁があるから登られた唐沢岳幕岩のように、そこにヤブがあるから登られたというヤブ尾根ルートを私は知らない。もちろん必ず最初に登った人間がいるわけだが、それが話題になるのは劔岳や槍ヶ岳くらいだろうか。登攀史の中でも夏季初登ということが話題になったことを私は寡聞にして知らない。また日本ではヤブが行く手を阻むルートは残雪期に登ることが常識でもあることも影響しているかもしれない。岩壁の場合はどんなに易しいルートであっても最初に登れば初登攀だが、ヤブルートの場合はなんというのだろうか。初漕ぎなどということは聞いたことはないし、岩壁と違ってヤブルートについては記録を残さない方が多いと感じるので判然としないこともあるだろう。私はかつて白萩尾根や大窓の頭西稜を夏に登ったことがある。両方ともに残雪期に登られたことがあることは知っていたが、夏については地元の友人知人も誰も聞いたことがないと言っていたのでひょっとしたら夏季初登かもしれない。もちろん誰かが登っている可能性は十分ある。しかしそのときに感じたことは、ヤブ山（ルート）というと一見無価値な印象を持たれかねないこれらのルートは、実はかなりエキサイティングでワクワクドキドキの宝庫でもあったという事実である。20歳の時に白萩尾根～小窓～小窓雪渓～池の平～ガンドウ尾根～十字峽～別山沢という計画を実行したとき、小窓雪渓の途中から池平山側の斜面のヤブに入った。まだ池平小屋へ通じる道は無かつ

た頃で我武者羅に夏道を目指したが、途中で古い坑道の入り口を2～3ヶ所見つけた。思いもかけない発見だったが、珍しいものを見つけた高揚感は今でも憶えている。その時はさらに仙人池からガンドウ尾根を下ったが、一日に標高差で約90mしか下れない日もあった。ヤブ尾根は下らない方がいい。また、白萩尾根と大窓の頭西稜では、他の山から見るとただのヤブルートに見えるのだが、生い茂った樹木がその尾根の真の姿を隠していたことが登ってみて明らかになった。樹木に覆われているので実際に登るまで分からなかったのだが、白萩尾根は終了点近くに小さなチムニーがあり、初めて登った時はロープを使って登った。また大窓の頭西稜にもチムニー状の岩場があり、このときはパートナーの肩の上に乗って突破した。この時は取り付きの西仙人谷の出合に滝があり、そこを登るのにボルトまで打ったが今の人たちならもっとスマートに登るだろう。つまりヤブルートというのはそもそも情報が無いことに加え、樹木に覆われていることから複雑な状況が隠されていることが多々あるので、その場での対処療法的な対応が求められるルートでもあるのだが、そう考えるとただのしんどいルートではなく、自身の対応力が要求される割と可能性と創造的な面もあるルートであると言えるのではないだろうか。そういったわけで一見して大した価値のないと認知されたルートであると決めつけることなく、人が見向きもしないからこそ私はひそかに価値を感じている。人が見向きもしないことに価値を見出すということは負け惜しみのように聞こえるかもしれないが、ルート図を片手にしてそれと現場を照合しながら登るのとは違う精神の充実感と高揚感を感じる。ヤブ漕ぎを厭わない者は、別にヤブを漕ぎたくて山に行っているのではなく、未知との遭遇を求めて“道の無い山＝既成ルートの定められていない山”に行くのであり、

そこに行くにあたりルート状況の予測や推測はするものの予想外の何かに会うことを密かに期待しているのだ。ルート図片手に登るというのは、今ならスマホ片手に…となるのだろうが、ヤブルートはおそらくスマホは役に立たないだろう。何故なら現在位置が分かっても、その場所の状況が分かるわけではないからである。だからわざわざヤブを漕ぎに行くと考えるのではなく、道が無いのだから未知の要素のあるルートを登るというルート開拓につながる視点で見直せば、多少なりともワクワクした気持ちをどこかで持てるということではないだろうか。そして何よりも、ヤブルートは登山の三大要素である「不安・不快・不便」が凝縮されているが、この三大要素は日本の冬山に十分に通じるものがあるので、冬山を登るための訓練にも最適だ。

登山はどんな登り方であってもそこに共通することは非日常的な世界との出会いであり、最大の非日常は情報のない未踏ルートだが、自分にとっての未知であればその体験の幅は大きく広がるはずだ。とは言っても既に存在する夏道は整備された競技場のような側面もあるので、ポピュラーな夏道ルートという整備された完全既知のルートから人跡未踏の完全未知のルートという二極の中間に位置し、双方の要素を程よくもつ橋渡しの存在が、いわゆる「道の無い山」としてのヤブ山なのではないだろうか。道の無いルートという言い方は矛盾した冗談のような言い方だが、道の無い山には既成のルートはないので自分が歩いたところがルートになる。何しろルートの真の状態は草木に隠されているのだから当たり前なのだが、情報のないところを登るとそういったことはよくある。要するに行ってみなければ分からないのである。

こうした発見？や遭遇？に関しては2020年9月に

1. 登山に関する調査研究

後輩のTと登った有明山東南尾根（仮称）で珍しい経験もあった。それは有明山中央峰から黒川沢と中房川の出会いに向かって落ちる尾根だが少なくとも地形図上には道はないし、燕山荘の社長をはじめ、地元の数人の方に訊いてみたがポピュラールート以外で少なくとも南面の中房川の側から登る道の存在は知らないと聞いていた。ところが行ってみると驚いたことに所々に踏み跡があり明らかに人為的に切った木の幹が確認できた。さらに驚いたのは頂上直下に5mほどの露岩帯があり、そこにハーケンが打たれていて木の橋をかけた残骸が確認できたことだ。このときは、こちらの調査不足ではあるが道が無いはずだと思って入ったヤブ尾根に道があったという誰も知らない事実を発見してかなり興奮した。この時は露岩帯を突破できる用意が無かったのでそこから引き返して帰りはビバークとなってしまったことで、もう一度登って真相を突き止めなければならなくなってしまった。

これらのルートはいずれも事前の情報はない。私の情報収集力の不足もあるだろうが大概の場合地元の岳友も知らないことが殆どだったので、ある意味それが魅力とも言えるのではないだろうか。これらの中には残雪期には登られた記録があったものもあるが、それも行動記録が読めたわけではなく、まして夏期の記録は見たことも聞いたこともなかったもので、仮に登られていたとしても新鮮この上ない。つまり、行ってみなければ分からないのであった。勿論行ってみたら本当に辛いだけのヤブルートもあったが、行ってみなければ分からないということは、予想外の状況に遭遇した時にその時の持てる力で乗り切るしかなく、それこそが山にぼる醍醐味であり、まさに生きている実感を与えてくれる。まるで悟りの境地のように達観してヤブを漕ぎ、木登りをしたりヤブに覆われているとはいえ急峻な地形にロープ

を使ったり、懸垂下降を強いられることもあった。ヤブ山は未踏の岩壁や厳冬期登山のような荒々しさも派手さも、そしてアピール度もないが、行ってみなければ分からないという魅力に満ちている。ヤブ山のことを縷々書いてきたが、ヤブ山へ行くことがこの本質なのではない。未知の世界に分け入り、目の前に現れた課題をその時の持てる力で乗り越えることが面白くないわけではない。そしてそれは登山の原点ともいえるのではないだろうか。ただし、道がないので、そこには結果的にヤブがあった…ということだろう。そしてそのヤブを漕ぎながら、未知との遭遇を期待してヤブの先にある未来に希望を託すのだ。

付録

今まで登った主なヤブ尾根を示します。中にはルート全体が深いヤブの場合もあればルートの一部が深いヤブである場合もあります。また現在はしっかりとした道になっていると聞いたルートもあります。また、もともと踏跡のついているルートもありました。

級は山本の独断によるヤブグレードです。但しヤブは一様ではないので本来は数値化にはかなり無理があります。

- 1 劔岳北方稜線（赤谷山－劔岳本峰）… 3 級
- 2 小窓尾根（池の谷への分岐－ニードル手前）… 4 級（頑張っても 6 時間かかる）
- 3 白萩尾根… 5 級
- 4 赤谷尾根側稜（往復）… 4 級
- 5 大窓の頭西稜… 4 級＋
- 6 白ハゲ西稜 3 級
- 7 白ハゲ東稜（5 月）
- 8 赤ハゲ東稜（5 月）
- 9 ハッ峰Ⅲ稜… 4 級
- 10 前劔岳東尾根（右稜＋左稜）… 3 級
- 11 猫又山西稜… 3 級
- 12 毛勝山大明神尾根… 3 級
- 13 ガンドウ尾根（下降）… 5 級
- 14 北仙人尾根（5 月）
- 15 燕岳西尾根（旧カモシカ新道）… 3 級
- 16 有明山南東尾根… 3 級
- 17 南アルプス深南部（不動岳－光岳）… 4 級
- 18 塩見岳北股尾根… 3 級
- 19 奥秩父両神山西岳新道… 2 級
- 20 天丸山－雁掛峠－赤岩峠－八丁峠－両神山（大ナゲシ北稜－赤岩峠）… 2 級
- 21 越後三山越後駒ヶ岳郡界尾根… 4 級
- 22 越後三山越後駒ヶ岳マキグラノツルネ… 4 級